

# ニッポンの 笑顔をつくる 北麓人



大切にしているあの本、  
愛用しているあの商品、  
つい笑ってしまうあの番組。  
つくっているのは、  
ぼくらの富士北麓で育った  
プロフェッショナルたちだった。  
日本中を笑顔にしている  
彼らの根底にはやはり、  
「北麓スピリッツ」が宿っている。

写真/小野口健太





担当していた「こち亀」「東大一直線」の単行本。どちらも漫画史に残る作品となった



1982年、田中角栄元首相へ取材する堀内さん。  
本宮ひろ志さんの政治漫画「やぶれかぶれ」を担当していた(集英社提供)

# 自立 自律 他律 利他

堀内丸恵さん

集英社 代表取締役社長

1951年、富士河口湖町大石生まれ。吉田高校卒業後、大学進学を機に上京。新卒で集英社に入社し、漫画編集者に。秋本治さんの「こちら葛飾区亀有公園前派出所」、小林よしのりさんの「東大一直線」などを担当し、人気漫画に育て上げる。週刊少年ジャンプ副編集長などを経て、2011年より同社代表取締役社長。

大自然と濃い人づきあいが、  
僕の心身を鍛えてくれた。

HORIUCHI Marue

——大石には、転校生としてやってきたそうですね。  
父親の仕事の関係で、生まれてすぐ大石を出て、長野や北海道で暮らしていました。それで、小学5年のときに戻ってきた。背中に山があつて、河口湖と富士山が広がっていて。北海道の平原とはまた違う、綺麗な景色だったな。同級生は37人。小さい学校だから親同士も同級生だったり、じいさんばあさんもお互い知ってる。みんな優しく、すぐ打ち解けました。  
——そのころから、漫画や編集に興味があつたんでしょうか。  
いや、全然頭になかった(笑)。大学時代、美術展をしょっちゅう見に行っていてね。お金もなかったけど、ほかのより安い集英社の美術全集を買って一生懸命見ていたわけ。こういうのつくって仕事になるんだつたら楽しそうだな。それがきっかけで集英社を受けたんです。でも僕の中では、集英社イコール画集を出してる会社だったから、漫画の編集をするなんて、全く思っていなかったですね。  
——まもなく連載がはじまった「こち亀」や「東大一直線」の担当に。大変なご苦労をされたんですね。  
少年ジャンプってのは、アンケートで人気がなかったら10週で連載終了。あの時は、編集者の僕も、漫画家の先生も新米で、どうやって生き残るかかってことだけでしたね。だから、漫画を読むみあさって、舞台や映画に通って、新聞のベタ記事だつて隔々まで読んだ。これ使えるんじゃないかって。漫画家と一緒に、どうやったら子どもにも喜んでもらえるかをずっと考えてましたね。でも全然苦労とは思ってない。本当に楽しかったですよ。  
——エネルギーに満ち溢れていたんですね。  
そりゃもう、身体は丈夫だから。大石の大自然を駆けまわって、毎日が高地トレーニングみたいなものですよ。おかげで高校時代は、五合目まで走る「富士登山強歩大会」で5位入賞。運動部でもなかったのに(笑)。それに、濃い人づきあいの中で育ったから、人との関係っていうの、ちっちゃいときから鍛えられていたし。そういう心身の強さは、役に立ちましたよ。  
——最後に、北麓の次の世代へメッセージを。  
山梨の人ってすごいバイタリテイある気がする。厳しさもあるけど、すばらしい気候風土で育つからだよね。それはすごく強みになると思う。それと、僕が40年働いてきて大事だと思うのは、「利他」。すなわち、人に喜んでもらうという好きなこと。そういう気持ちで、自分の好きなことに一生懸命でいてほしいですね。



「脱出計画」に燃えていた河高時代のひとコマ。右から2番目が柴田さん（本人提供）



代表作のひとつ、電子体温計けんおんくん。曲線が織りなす親しみやすいデザインでロングセラーになっている。

——少女時代は、富士吉田を「脱出」しようとしていたそうですね。

4人きょうだいの末っ子だし、ずっとここにはいないだろうと思っていました。日々「脱出計画」を考えていた（笑）。そのうちに、好きだった美術やデザインが学問として学べるのと知って、美大を目指すようになりました。でも、地元ではデッサンするための鉛筆もケント紙も売ってない。本当に大変でしたよ。今となっては、かえって画材がなかったのが良かったのかな。野山をかけめぐって、絵を描くだけでは得られない体験ができた。それって、創作にはすごく重要なことですから。

——大学卒業後は東芝のデザインセンターで勤務し、早くも20代で独立されました。

私としては計画通り。フリーランスのデザイナーになるために美大に入って、東芝でキャリアも積んだので。でも最初は厳しくて、本当に何でもやっていた。そこそこ売れてからも、家族からは「プーターロー」と言われて。いつか山梨日日新聞に載ったら、やっと納得してくれました（笑）。

——ご実家は機屋さんなんですよ。

そう。家に帰ると、余ったバーバリーの生地で作った座布団カバーがあったりね（笑）。近所もみんな機屋で、会社勤めしてる大人はいなかった。だからフリーランスは、私にとって普通

のことなんです。あと、これも親が職人だったからかな。クラフトマンシップっていうか、「いいものをつくりたい」という気持ちはずっとありますね。

——ものづくりの精神ですね。

明見の人って、なんでも自分でやるじゃない。食事はもちろん、洋服や正月飾りも。離れてみてわかったけど、それって人間の本质に近い暮らし。すごく面白いなって。なんでも手に入る東京じゃ、つくるものなんてないんだもの。吉田の織物も、いいものをつくり続けて、信頼性があるから生き残ってきた。今や世界レベルのクリエイターたちが注目していますよ。

——そんな故郷に、今思うことは。

人も来るようになってほしいんだけど、独特の暮らし方とか、景観とか、変わらないでいてほしい部分もあります。例えば山中湖や河口湖。昔はすごく神秘的な湖だったの。80年代に開発の手が入って、タレントショップもできたりして、見る影もなくなっちゃった。これからはデザインが外から入ってくるだろうけど、やっぱり地元の人がインシアチブをもってコントロールしていかないと。今はもう、山梨の中の富士北麓じゃなくて、世界とダイレクトにつながってるんです。きっと若い人はそれを肌で感じてるはず。世界のなかの北麓っていう意識を持って、いい街をつくってほしいですね。

親も職人だったからかな。  
「いいものをつくりたい」って思いは変わらない。

SHIBATA Fumie



北麓のフィールドは  
世界だ!!

柴田文江さん

プロダクトデザイナー

富士吉田市小見生まれ。富士河口湖高校から武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科を卒業。東芝を経て1994年に独立し、Design Studio Sを設立。無印良品「体にフィットするソファ」、オムロン「けんおんくん」などを手掛け、グッドデザイン賞金賞など受賞歴多数。2003年よりグッドデザイン賞審査委員。2014年より武蔵野美術大学教授。



— 子どものころから、お笑いが好きだったそうですね

小学校のころから、松本人志さんが大好きで。「こつつええ感じ」とか毎週観てました。クラスでグループに分かれて出し物やったときには、友達と「桃太郎」のパロディみたいなネタ一生懸命仕込んだんですよ。そしたら本番でダダ滑り(笑)。そのころから芸人への憧れはあったのかな。本当になろうなんて思ってたんですけど。それより、とにかく都会で大学生になりたかったですね。

— 学生時代はどんな生活でした？

横浜の大学に進んだんですけど、ほんつとダラダラしてましたよ(笑)。今思えば贅沢な時間だったよな。それで、就活のときに『やっぱりお笑いやりたいな』って思うようになって。でもさすがに大学出でず芸人とは思わなかった。音楽も好きだったから、音楽雑誌の出版社とかレコード会社を受けてみたんですよ。もちろん、見事に全部落ちた。そしたら本気で笑い行ったらって吹っ切れて、すぐにNSC(吉本総合芸能学院)に願書出しました。母親には猛反対されたけど(笑)。

— ずいぶん思い切りましたね。

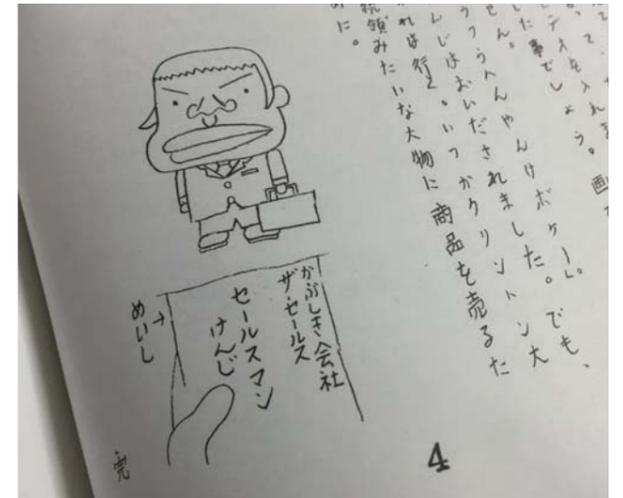
大卒で22歳だし、年齢的にもどうかと思っただんですけど、入ってみたら案外自分と同じような境遇の人が多くて、そりやそうですね。同期が700

北麓は、東京のすぐ近くなのに、すごい良い場所。俺がもっと有名になって、広めなきゃ。

SHIMASA Kazuya



本番前の楽屋。メイクを終えた若者の表情には、芸人の風格が宿っていた。



下吉田第二小時代の文集に収められた、嶋佐少年の作品。主人公の営業マン「けんじ」が迷セールスを繰り返る。

嶋佐和也さん

お笑い芸人

なるようになる

1986年生まれ。富士吉田市緑ヶ丘で育ち、吉田高校卒業。大学卒業後、吉本総合芸能学院(NSC)東京校に入学し、2010年、同期の屋敷裕政さんと「ニューヨーク」を結成。コント・漫才で人気を集める。ABCお笑いグランプリでは、2014年から3年連続決勝進出。2016年4月からは、冠番組である「ニューヨークのオールナイトニッポン0」でパーソナリティとしても活躍中。

人いたんだもん。おっさんもおばさんもいたし、東大卒とか国税局の元職員とかも。授業はめっちゃめっちゃ厳しかったけど、みんな同じように不安だから、仲いい奴もすぐできました。

— 相手の屋敷さんも同期ですよね。

はい。卒業間際に向こうから誘ってくれて。2年目くらいから少しずつテレビに出させていたかどうかは知りませんでしたね。でも、ブレイクしないまま7年経っちゃった。関西のお笑いグランプリで決勝行ったりはしてんですけど、「M-1グランプリ」とか「キングオブコント」とかには1回も行ったことない。でも、やるからには、行けるとこまで行きたい。モチたいし、ビッグになりたいですよ。

— 山梨出身の芸人で少ないですけど、吉本は山梨県出身者っていないんですよ。だから、僕が一番有名になって、山梨の名を上げなきゃですよ。東京来て改めて思うと、北麓ってやっぱりいいところだし、富士山見るとテンション上がる(笑)。

— 吉田にも結構帰ってるんですよね。

ほんと近いですからね。結婚式とか呼ばれても日帰りできる。だから、地元の若い人もどんどんこっちに出てきたらいい。なるようになるんです。失敗したって、帰れる良い地元がすぐそばにあるんだから。